
高校アニメ製作部

yukaringo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

高校アニメ製作部

【Nコード】

N5597D

【作者名】

yukaringo

【あらすじ】

アニメ製作部のチラシを拾ったユズキが、製作部の男子たちに巻き込まれていくギャグ+ほのぼの×恋愛の物語。たま〜にドキドキあり。

第一話 馴れ馴れしい人

私の名前は安藤ユズキ。

超平凡な高校一年生。

だけど・・・超平凡だから、部活動も超平凡というわけではなかった。

そう。それはたった一週間ほど前の、入学式のことだった。

私は、入学式が終わって軽い自己紹介も終わったので、家に帰ろうと校舎を歩いていたらときだった。

ヒラリと、私の足元にチラシのようなものが落ちてきたのだった。私はそれを拾い上げ、声に出して呼んだ。

「希望するおもしろい部活がなく、帰宅部決定になりそうな人はコチラ！今は使われていない放送室でお待ちしています・・・」

そのチラシは、私にとっては好都合だった。親には「帰宅部は避ける」とうるさく言われていたが、希望する部活がなかったから。

私は、さっそく使われていない放送室へむかった。

しかし、放送室のドアには、「来週の月曜日（つまり、この日から一週間後）まで休業です！新しく入る人は、待っててね！」という張り紙が張ってあった。

その日の私は、仕方ない、待つかと考えていたけれど。今となつては、待たないほうが吉だった。

そして現在。私は放送室の前にいる。

そして、パイプ椅子に腰掛けた男子が言う。

「ようこそ、期待の新人君！」

私はすべての疑問に首をかしげた。

「あなたは誰ですか」

パイプ椅子に腰掛けた男子と、周りにいた男子たちが目を丸くし

た。

そして、周りにいた男子その一が、私に言った。

「あー、君。人に名を聞く前に。自分から名乗ったらどうかね。」

「あ、すいません。一年の、安藤ユズキです。で、あなたたちは誰ですか？」

私はパイプ椅子に座っている人を見つめた。

「む、む、ゴホン。私は2年の園村マキだ。よろしくな、ユズキ。」

いきなり呼び捨てなんて、なれなれしい人だなあ。

そうすると、男子その二が言った。

「あー、マキねえ、動揺してるんだよ。自分が世界一有名だと思ってるから。」

「へえー・・・で、あなたは誰？」

すると、男子その二はちよつと引き下がった。

「2年の東カオル。」

私は向きを変え、男子その一に言った。

「で、あなたは？」

「あ、俺？2年の空野カイ。よろしくな、ユズキ！」

「ああ・・・よろしくお願いします」

私は、この人たちはどこまでも馴れ馴れしいなあと思った。

「自己紹介は済んだか？よし、じゃあ、我々の部活動の説明をするから、よく聞け。」

マキ先輩が言った。

そういえば、何をする部活なのか聞いてなかったな。

「大雑把にいうと、この部活はアニメをつくる部活だ！」

「なかなかの暇つぶしになりそうですね」

私が言ったとたん、マキ先輩、カオル先輩、カイ先輩の顔つきが変わった。

そして、カオル先輩は私を指差しながら言った。

「ユズキいいい！！！！！！貴様、何を言ったのかわかっている

のかあああ！！」

「え？」

次に、カイ先輩も私を指差して言った。

「ユズキいい！！！！さっき言った言葉をもう一度言ってみろー！！！」

「え・・・なかなかの暇つぶしになりそうですね、と・・・」

そして最後に、マキ先輩が私を指差して言った。

「その考えが間違っているのだああ！！！！！！ただの暇つぶしではなく！！まじめなアニメ製作部なのだああ！！！！！！」

「はあ・・・すみません」

その時だった。

放送室のドアが開いて、3人の男子が入ってきた。

そして、私を指差していたマキが、その三人に言った。

「遅かったではないか！こちら、一年の安藤ユズキだ！入部が決定している！」

三人の内が一番背の小さい男子（おそらく143cmくらい）が、私に向かって歩いてきた。

「あ、一年の安藤です。よろしくお願いします」

「二年の初山楓だよ、よろしくね。杏仁豆腐さん」

その会話に、3人の中で一番背の高い男子が割って入った。

「俺、二年の柊冬馬。よろしくな、杏仁豆腐」

「はあ。よろしくお願いします」

そして、残りの男子が私に言った。

「2年の広山櫂。」

「よろしくお願いします・・・」

私がパイプ椅子に腰掛けると、マキ先輩が私にペンを握らせた。

「？何するんですか？」

「ユズキがどれだけ絵がうまいか確かめるんだ。何でもいいから、書いてみる」

「あ、はい」

私は、小学生のときに思いついたオリジナルキャラクターを考えた。こんな感じで、こんな感じだったはず。

「できました」

私が絵をみせると、楓先輩が身を乗り出してきた。

「すごい！杏仁豆腐さん、うまい！」

本当に一年生なのかな、この人。

「うめーじゃん！杏仁豆腐！」と、冬馬先輩。

「うむ！合格だ！ユズキ！」と、マキ先輩。

私は手を止めた。

「合格って？」

「決まっているだろ？今日からユズキがアニメの絵を描いて、昼にテレビで学校中に放送するんだよ。」と、カオル先輩。

「え、ええええええええええ！！！？？」

「何で驚くんだよ、杏仁。」と、カイ先輩。

「あ、その呼び方、やめてください。……だって、私、この程度の絵しかかけませんよ。」

すると、**樗先輩**が言った。

「絵の担当は俺だから……杏仁はアシスタント」

「その呼び方、やめてください！！」

「なんでー？かわいいよーう？」と、楓先輩。

「そうだー、かわいいぞー」と、冬馬先輩。

「ま、決まったことだからな、杏仁！」と、マキ先輩。

そんなこんなで、私には「杏仁豆腐」が定着してしまった。

私……ここでやっていけるのかなあ……。

第二話 櫛の本性

昨日は、本当に疲れた。

アニメ製作部の人たちに変なあだ名つけられるし・・・もう、最悪。

私、安藤ユズキは俯きながら廊下を歩いた。

その時、放課後を告げるチャイムがなった。

そして、私はそのチャイムと共に、マキ先輩の脅し文句を思い出した。

「おい、ユズキ！私の父はこの学校の理事長だ！もし放課後に来なかったら、この学校に居られなくしてやるぞ！」

追い出されるのは困る。この学校は、我が家の財産でようやく通える学校だったから。

私は、嫌々ながらも放送室のドアを開けた。

そこには、左から楓先輩、櫛先輩、マキ先輩、カオル先輩、カイ先輩、冬馬先輩の6人がそろっていた。

「遅いぞ！ユズキ！」と、マキ先輩。

「はぁ・・・すみません」

「そうだー、遅いぞ、杏仁！」と、冬馬先輩。

「その呼び方はやめてください！！」

私と冬馬先輩の取っ組み合いに、マキ先輩が割って入った。

「あー、ユズキ！櫛の手伝いをしてやれ。」

「あ、はい。」

私はパイプ椅子を櫛先輩のところまで引っ張っていった。

「あの、櫛先輩。私は背景を担当していいですか？」

「ああ、うん。頼む」と、櫛先輩。

昨日、マキ先輩から聞かされたのだけれど。私たちが作るアニメ

のストーリーは、男の子のルディ（マキ先輩）が、不思議な国に迷い込んでしまつて、その国に同じく迷い込んだ男の子のルーシイ（カオル先輩）と力をあわせてその国から脱出するというお話らしい。ちなみに、楓先輩は出てくるウサギで、カイ先輩は意地悪な馬、冬馬先輩は鍵を握るお姫様なんだそうだ。

「そういえば、櫛先輩はアテレコしないんですか？」

私がそういつたとき、櫛先輩は手を止めて固まつてしまった。

「あのー、櫛先輩？」

櫛先輩は、話そうとしない。

そこに、楓先輩がやつてきた。

「あのねー、杏仁豆腐さん。櫛ちゃんは前のアテレコでかんじやつたから、それがトラウマにー……」

楓先輩がまだ言いかけてるときに、櫛先輩は楓先輩の口をふさいだ。

「かんじやつたんですか」

「……うん……」

櫛先輩の自信なさげな声に、笑ってしまった。

櫛先輩は落ち込んだのか、俯いて再び絵を描き始めた。

でも、その顔はかすかに笑っているように見えた。

マキはアテレコ室のガラスに張り付いて、櫛とユズキを見た。

「何か仲良くねー？あの二人……」

「そうか？」と、カオル。

「でも、お友達だから、仲いいのはいいことだよねえ。はやく打ち解けてもらいたいしねえ」と、楓。

その言葉に、マキの瞳が輝いた。

「そつかあ！お友達かあ」

「どうした？マキ」と、カイ。

「お友達って言うことで、安心したんじゃないの？」と、冬馬。マキは、スキップをしながら鼻歌を歌っていた。

第三話 入部希望者、現る！

昨日も、どつと疲れた。

アニメの絵は宿題になるし、定着した杏仁も消えないし。でも、ひとつわかったことがある。櫛先輩も、以外にドジだということ。思い出したらまた笑えてきて、私は隠れ笑いをした。

朝八時三十分。

私、安藤ユズキはアニメのアイデアを考えていた。その時だった。

「あーんどーさんっ」

「・・・はい？」

クラスの子だった。名前は未冬。未冬ちゃんだった。

「安藤さん、あなたはアニメ製作部に入ってるんだよね？」

「うん。」

「うらやましーい！ねえ、安藤さん。頼みごとがあるんだけど。ちよつといいかな？」

「・・・はい？」

未冬ちゃんは目をキラキラ輝かせて、私に言った。

「あたしも、アニメ製作部に入れてくれないかなっ！」

中休み。

私は二年のA組に行った。

遊びに来たわけではない。未冬ちゃんの入部について、部長の園村マキ先輩に相談しに来たのだ。

私が姿を見せると、マキ先輩は満面の笑みで手を振った。

「よおおおお！杏仁！」

「その呼び方、やめてください。」

二年生の人たちが、私を好奇の目で見ている。しかし、私はかまわず続けた。

「一年生から、入部希望者が出ているんですけど・・・」

「入部希望者！？それはどんなだ！？」

マキ先輩は、未冬ちゃんが生きたように、目をキラキラ輝かせた。

私は、どんなだ！？とか言われても困るだけだったので、未冬ちゃんを部活メンバーたちと面接させた。

未冬ちゃんは緊張の「キ」の字も無いようで、ニコニコしながら一方的にお喋りしていた。

櫂先輩はいつも以上にニコニコし、カイ先輩も冬馬先輩もカオル先輩もそして部長も、ニコニコしながらただ相槌をうつっていた。楓先輩は・・・いつも通りに見えた。

面接終了後、部活メンバーたちは私に駆け寄ってきた。

「ダメ・・・アイツ、没・・・」と、マキ先輩。

「同じく・・・」と、カイ先輩。

「以下同文・・・」と、冬馬先輩。

「・・・ダメ・・・」と、カオル先輩。

「僕も、すごく疲れたあ」と、楓先輩。

「・・・」ノーマコメントは、櫂先輩。

マキ先輩は私を指差して言った。

「ユズキ・・・お前、あの皮膚ゆとかいう子に言つてくれ。

入部はあきらめろ・・・と。」

「ええええっ！！??」

私は素直に驚いてしまった。

「お前しか居ないだろう」と冬馬先輩。

「でも・・・かわいそうじゃありませんか？」

櫂先輩は、私に言った。

「じゃあ、その子にいつてやれ。アニメ製作部の男たちは、カッラをかぶったただのハゲだと・・・！」

「え」

櫂先輩以外の人が、「ヤメテーーー」という顔になった。

「そうですね、わかりました！」

私は放送室を飛び出して、未冬ちゃんのもとへ向かった。
私がカツラのことを未冬ちゃんに暴露すると、未冬ちゃんは入部
を取り消した。

そして私が放送室にもどると、五人の鬼がたっていた。
私に明日は訪れるのかなあ・・・。

第四話 記憶消失のチョコレート

五人の鬼に襲われたけれど、何とか生還することができた。

私の心の中は、未冬ちゃんに申し訳ないという気持ちでいっぱいだった。でも、櫛先輩直伝の誤魔化しで、なんとか傷つけずにすんだ。

私はかなり安心した。未冬ちゃんが泣いちゃうんじゃないかなあとか思っていたから。

私が安心しきっていると、お昼の時間がやってきた。

「未冬ちゃん、一緒にお昼どう？」

未冬ちゃんは、黙って扉のほうを指差した。

「？」

私が、未冬ちゃんが指差した方向を見ると、そこには上級生らしき女子が三人。何のようだろう。

女子一「ちよつとさあ、来てもらっていいかな」

「・・・？はい」

呼び出されたところは体育館裏。いかにも、って感じた。

女子三「あんたさあ・・・マキ君の何なわけ？」

「へっ！？」

女子二「ただの取り巻きなの？彼女なの？」

取り巻きでも彼女でも無い。ただの部活仲間だ。

やっと状況が理解できてきた。つまり、

私がマキ先輩のクラスへ行く。女子三名が勘違い。呼び出し。

「取り巻きでも彼女でもないです。マキ先輩とは、ただの部活仲間です」

女子たちが顔を見合わせる。多分、勘違いしたことを恥じているのだろう。しかし、

女子一「へえ・・・でも、クラスとかには押しかけないほうがいいよ。勘違いしないでよね？あんたがマキ君の特別なわけじゃない

んだから」

そついい残し、女子たちは去っていった。

私は腕時計を見た。もう、ほとんどお昼ごはんを食べる時間が無い。

私はダッシュで教室に戻った。

放課後。私は放送室にやってきた。

早く来すぎただろうか。放送室には誰も居ない。

それにしても、おながが減った。お昼は、ほとんど何も食べていないから……。

先に絵を書いていようかな、と思って、机にかばんを置いた。

「…………あれ？」

机の上には、チョコレートの箱があった。

私はその箱を開き、中を見る。おいしそうなチョコレートが並んでいる。

私はなにも気にせずに、おいしそうなチョコレートを口に入れた。チョコレートをかんだ瞬間に、私の意識は遠のいていった。

マキとカイ、冬馬、櫂、カオル、楓たちは、少し放送室に行くのに遅れていた。

掃除が長引いたからだった。

「あー……平凡な高校なのに、なんでこんなに廊下が長いんだ？ 理事長の息子ー」と、冬馬。

「知らん。設計した人に文句を言ってくれ」

「もう走るの疲れたあー。どうにかしてえ、理事長の息子さん」と、楓。

「お前はもう少し体力をつけろ。」

「廊下を長くする金があるなら、もう少し学費を抑えてもいいだろ、普通。」と、カイ。

「同感だ……」と、カオル。

「それに対しては同感だな。」

マキたちは長い廊下（無駄に）を左に曲がり、放送室の扉を開けた。

「すまんユズキ！おそくなっ・・・」

放送室に居たのは、眠りこけたユズキ（通称杏仁豆腐）だった。

カオルがユズキにかけよる。

「ユズキ!？」

「ん・・・」とユズキ。

ユズキはむくつと起き上がり、マキたちの顔を見ながら目を細めた。

「杏仁豆腐さん？」と、楓。

「うるさいな・・・」と、ユズキ。

ユズキの言葉が発されたとき、皆いつせいに同じリアクションをとった。

「!!!!??」

ユズキは面倒くさそうに椅子に座り、机をバンバンと叩きながら言った。

「誰か！お茶もってこい!!」

すると、カイが小声で、

「やばいぞ！ユズキの人格が反転している！」

「ゆずちゃん、こわいい・・・」と、楓。

「あ・・・あれ、ボンボンチョコレート!？」

マキは、机の上にあったチョコレートの箱を指差した。

「ユズキ・・・あれ、食ったのか・・・」と、冬馬。

「ボンボンチョコレートで酔った人、初めて見た・・・」と、櫛。

ユズキは待ちきれなくなったのか、両腕を振り上げながら襲い掛かってきた。

「はようお茶用意せんかい!!」

「うおお!!??」

襲い掛かってきたと思いきや、ユズキはへろへろと冬馬の上にか

ぶさった。

マキは目を点にした。

「ねてる・・・？」

「寝てる。」と、冬馬。

冬馬はユズキの寝顔を見ながら、微笑んだ。

第五話 ユズキの手作りカレー

私は、頭痛で目が覚めた。

それにしても、何で自分の部屋に居るのがわからない。

両親は海外出張でいないはずだから、帰られるわけが無い。

確か私は放送室に居て、机の上のチョコレートを食べ、その後
に眠くなって・・・。

眠くなったあたりから、記憶が途切れている。

私はベッドから起き上がり、時計を見た。・・・もうすでに、学
校の門が閉じている時間帯だ。

私は諦めて、漫画を引つ張り出した。随分と古い漫画だが、結構
笑える。

私が漫画で笑っているときだった。

「ウアハハハハハハ！」

さつきもお話した通り、両親は海外出張でいなく、私一人なので
す・・・一人なはず。

私は用心深く階段を下り、手には木刀を持っていた。

そこに居たのは、恐れ多き理事長の息子率いる部員たちだった。

「杏仁！おきたか！」と、マキ先輩。

「ウアハハハハハハ！！見る杏仁！マイケルが・・・マイケルが・・・

・ウアハハハハ！！」と、カイ先輩。

「杏仁さぁん、お菓子ないのぉ？」と、楓先輩。

「杏仁！今日の晩飯は何だ？」と、カオル先輩。

「杏仁！ロデオボー！は無いか！？」と、冬馬先輩。

「杏仁・・・すしの出前を・・・」と、櫻先輩。

「・・・何やってんですか！不法侵入ですよ！それと、カイ先
輩もマイケルとジャクソン君の漫画をしまってください！」

皆、やりたい放題。

それに、散らかし放題。

「杏仁さん、お菓子・・・」

「黙ってください」

私は楓先輩に軽く笑いかけた。

「自分の食べたいものとかを要求する前に！散らかしたものの片付けてください！！」

「えー」と、部員（櫛先輩除く）。

「片付けないと、家からつまみ出しますよ？」

私が言うと、部員たち（今度は櫛先輩介入）は部屋を片付け始めた。

「あと、晩御飯は私が作りますから。できるまで待っていてください。」

楓先輩とマキ先輩が目を輝かせた。

私はキッチンへ向かい、簡単なカレーでも作ることにした。

幸い、材料は冷蔵庫にすべて入っていたので、私は早速きり始めた。

「あつ」

しまった。野菜を千切りにしてしまった。

「ああつ」

しまった。肉を焼いてしまった。

「あああつ」

しまった。ルーを全部入れてしまった。

「ああああつ」

しまった。カレーのそこが焦げてしまった。

そんなこんなで、私の手作りカレーが出来上がった。

「はい！召し上がれ」

マキ先輩たちは怪訝そうな顔をして、カレーの入った皿を覗き込んだ。

「おい、杏仁・・・イモ、ちゃんと入れたか？」と、マキ先輩。
「え？入れましたよ？もしかしてとけちゃってます？」

「おい、杏仁・・・カレーに油が浮いてるけど・・・。」と、カオル先輩。

「あー、お肉、間違えて焼いちゃったんですよ。」

「杏仁・・・カレーがすごくドロドロだけど」と、カイ先輩。

「あー、ルー全部入れちゃったんですよ。」

「杏仁・・・このカレー、苦いぞ」と、冬馬先輩。

「あー、焦がしちゃったんですよ。文句あるなら、食べなくていいですよー」

「いえ！ないです！」と、部員たち。

私はおいしそうに（無理してる）食べてくれる先輩たちを見守っていた・・・。

第六話 アテレコデビュー + 冬馬の心境

「すみません、昨日は私のせいで……」

私はマキ先輩たちに頭を下げた。

「心配要らないって。な？マキ」と、カイ先輩。

?

「うむ。心配は要らぬぞ、ユズキ。そのかわりに、いっしょにアテレコするんだからな。」と、マキ先輩。

え？

「ええええええええええええ！！？？」

「何驚いてるんだ？」と、カオル先輩。

「そりゃ、驚きますよ！私みたいなド素人がアテレコなんて……」

L

「ま、第十話までの絵は仕上がってるから、ゆっくりでいいぞ」と、冬馬先輩。

「なんたつて放送まであと一週間しかないからねえ」と、楓先輩。

[illegible]

ええ！！！！」

「杏仁の役は、杏、っていう女の子の役だ。まあ……悪役かな。」

「と、**樗先輩。**」

「でもまあ杏仁に似てるし……いい役だと思うぞ。じゃあ放課後、放送室でな」と、マキ先輩。

マキ先輩の最後の言葉に合わせて、皆は去ってしまった。

そんなあ……私がアテレコなんて……。

中休み。私が朝のショッピングな出来事でうなだれていると、未冬ちゃんがやってきた。

「安藤さん……」

「んー・・・？なあに？」

「ちょっと、ここでは言えないから・・・」

體育館裏。

「私ね、昨日見ちゃったんだ……」と、末冬ちゃん。

「安藤さんが、冬馬先輩に抱きついてるところ」

な・・・何！？冬馬先輩が私に抱きついたらんじゃなくて！！！？もしかして、チヨコを食べて意識が喪失したときに・・・！？

「え……」

「好きじゃないよ。」

「・・・かといって嫌いでもないし、好きでもない。友達以下、知り合い以上ってとこかな」

冬ちゃん。

未冬ちゃんには笑顔で去っていった。

体育館裏で、ユズキと末冬の話聞いてしまったから。

いるようだ。

「いや……なんでも……?」

「ぺぶろ!!?」

楓はにこりとわらう。

「冬ちゃんが変な言葉を使うときは、図星を突かれて困っているとき」

「うつ、うるせえ!!」

「ホントにすぎなんだねえ、杏仁さんのこと」

「え・・・」

楓は何も起こらなかったかのように、冬馬の前から去っていった。

第七話 ブラックモード、発動

昨日は、すごく疲れた。

アテレコすることになっちゃうし、放課後に先輩たちにしごかれるし。

私は通学路を通りながら、桜を眺めた。

「あ！杏仁豆腐さんだあ」

うげ。楓先輩。

「おはようございます」

「おはよう」

昨日は、楓先輩も厳しかった。この人は、二重人格なんじゃないだろうか。

「そういえば、楓先輩はこの辺に住んでるんですか？」

「そうだよ。あの辺かなあ」

「結構近いですね」

「そうだねえ。今度遊びに行つていっい？」

—昨日の記憶が頭によみがえる。

そして、私は笑顔で言った。

「散らかさないならokですよ。」

「うん、約束ね」

私は下駄箱のほうへ行き、靴を履き替えようとした。

「あ・・・」

私の下駄箱の中には、一通の手紙があった。

「どうしたの？杏仁さん・・・」

運悪く、楓先輩が現れた。

「なあに？それ・・・」

「あっ」

楓先輩のブラックモードが発動し、楓先輩は下駄箱に入っていた手紙を取った。

楓先輩は、手紙を読み上げ始めた。

急な手紙で驚かせてごめん。

安藤に、話したいことがあります。

時間があれば、放課後に体育館裏まで来てください。

「べただねえゝ．．．」

「．．．楓先輩？」

「ばつさり断りなよお。無名だし」

「あ．．．はい。放課後は部活もありますし．．．できるだけ早く終わらせますね」

楓先輩のブラックモードが解けた。

「うん！まってるからねえゝ。早く行こゝ」

「はい」

中休み。

私がゆつたりと読書をしている時だった。

ズパアアアアン！

「ユズキイイイイイ！！」

急に教室のドアが開き、部員（楓先輩と櫛先輩除く）がやってきた。

「なつ、何ですか先輩方」

「何ですかじゃないだろユズキイイイイイ！！」と、マキ先輩。

「お前がラブレターもらったって話が！！」と、冬馬先輩。

「もらいましたけど．．．ダメですか？」

「待ち合わせの時間はいつだ！？」と、カオル先輩。

「え．．．放課後、ですけど」

「よし、殺そう！部活の時間を邪魔するやつは殺そう！」と、カイ先輩。

「そうだあー、殺すぞーう！」と、マキ先輩。

「ま、待つてください。私がちゃんと断りますから、その・・・」
えーと、こういう時ってどう言えばいいんだっけ？・・・余分じやなくて・・・えーと・・・。

あ、思い出した。

「余計」

部員たちが硬直した。

「なことはしなくていいですよ」

「ユ・・・」

「はい？」

「ユズキのバカアアアア！！！！」

マキ先輩、カイ先輩、冬馬先輩、カオル先輩は走り去って行った。
私はそれを、口をあけて見送った。

第八話 悪魔の呼び出し（前書き）

悪口や文句は受け付けませんが、感想などはどしどしお送りください
い ^ ^

第八話 悪魔の呼び出し

先輩たちが何で怒っていたのかもわからずに、放課後がやってきた。

私は教室を後にし、体育館裏にやってきた。
しばらく経った。

だけど、呼び出してきた相手は来ない。

私は諦めて、体育館裏から離れようとした。

「あゝ・・・安藤さん・・・帰っちゃうの・・・？」

私は声の主の顔を見た。

ドクロ。

ドクロの仮面。

私は飛び退きそうになった。

「あ・・・すみません。」

「いえいえ・・・ウフフフフ」

ドクロの仮面（性別不詳）さんは、不気味な笑い声を立てた。

ドクロの仮面さんが、私に何のようだろう。

「用ですか？アリアリですよ・・・ウフフフフ」

ドクロの仮面さんは、ガサガサと黒いマントを漁り始めた。

「科学部で発明した、このチョコレートの感想を頂きたいんですよ」

「へ？」

よく見ると、それは見覚えのあるチョコレート。

あの・・・食べたなら意識を喪失するチョコレート・・・。

「安藤さん、これを食べたでしょう？ウフフフ・・・味はどうでした？」

「え・・・覚えてません」

ドクロの仮面の黒いマントさんは、「はあ」とため息をついた。

「お酒と砂糖と塩とコショウとソースとケチャップとカラシとワ

「うまいぞ、杏仁！」と、マキ先輩。

「ハ・・・ハハ・・・」

良かった、ソースとか入ってたのは私のだけみたいだ。

私が胸を撫で下ろそうとした瞬間、

ドサッ

チョコを食べた先輩方が、全員倒れた。

「先輩!？」

私が先輩方をゆすると、先輩全員が面倒くさそうに椅子に座って言った。

「お茶もってこい!」

第九話 鼻血事件

「ストーカー？」

マキ先輩たちは、眉間にしわを寄せて言った。

「ええ・・・確認は持てていないんですけど、そんな感じがするんです」

マキ先輩は、マイコップにマイティーを注ぎながら言った。

「そうか・・・ならば仕方が無い。24時間ユズキについて回らねば」と、マキ先輩。

「そっちの方がストーカーじゃないですか」

「いいのカー？まだアテレコ終わってないぞー」と、マキ先輩。
「・・・」

私は黙って、家から持参したインスタントコーヒーを飲んだ。

放課後の放送室は、外から見ると楽しそうに見えるかもしれないが。こちらと全然楽しくない。むしろ悲しいと言いたいくらいだ。

昨日は最悪だった。藤山先輩を本気で恨んだりしたな。

酔っ払った先輩たちをたたき起こすのに何分かったか。

「ストーカーねえ・・・年頃の女の子の被害妄想じゃねえの？」

と、冬馬先輩。

「それも考えたんですけど・・・まあ、確認は持てていませんし・・・」

「もしストーカーがいたら、どうするの？」と、楓先輩。

櫻先輩と楓先輩除く四人は、しばらく間を置いて言った。

「殺る・・・！」

「だよねえ」

私はコーヒーを吹き出しそうになり、むせた。

「げえほ、げほっ、櫻先輩はどうします？」

櫻先輩の顔に影がかかった。

「殺る・・・！」

「だよねえ〜」

やばい。鬼病は櫂先輩にも感染している！

私はチヨコの山（藤山先輩＋科学部員作）を見た。

「それより・・・あのチヨコどうするんです？」

「埋め立てるか」

マキ先輩が立ち上がった。

「それもそうだな」と、カオル先輩。

「俺も賛成」と、カイ先輩。

「ホラ、杏仁も行くぞ」と、冬馬先輩。

「あ、はい。」

「僕も行く〜！櫂ちゃんもいこ〜」と、楓先輩。

「ああ、うん」と、櫂先輩。

全員が放送室から出ようとすると、マキ先輩が制した。

「いかん！廊下歩行は守らんといかん！みんなー、二列になれー

！」と、マキ先輩。

「マキさあ・・・この前廊下は知ってなかったっけ」と、カオル先輩。

「私は生まれ変わったのだー」と、マキ先輩。

「知ってました？廊下歩行って、廊下で騒がないことも入ってるんですよ」

全員は、二列になりながら沈黙した。

埋め立て、終了。

「疲れましたねえ」

「ふう〜、つかれたあ〜」と、楓先輩。

「何でこんなにチヨコレートが・・・」と、カイ先輩。

「なんというか・・・鼻血が出そうだ」と、マキ先輩。

「だ、出すな！誰か、ティッシュ！」と、カオル先輩。

「あ〜・・・俺も、鼻血出そう」と、冬馬先輩。

「ほい、ティッシュ」と、櫂先輩。

「おお～～～サンキュー榨～～～」と、マキ先輩。

「フガッ、やばい・・・鼻血のくしゃみでそう」と、冬馬先輩。

「ギャアア！！ヤメロ！！誰か、奴のくしゃみを阻止しろおお」

と、カオル先輩。

「え？」

ブアックション！！

・・・みんな、血だらけ。

冬馬先輩は、私含む六人に血祭りに上げられることになったとき。

第十話 ストーカーの正体+お泊り

冬馬先輩鼻血事件の翌日。

「やつぱり、ストーカーですよ」

私除く部員たちは、怪訝そうな顔をした。

「昨日帰る途中に見たんですよ。チラツとですけど、電柱の後ろに……」

マキ先輩は立ち上がった。

「よし、こうなったら杏仁の家にお泊りするしかないぞ!」と、マキ先輩。

「待つてました〜」と、楓先輩。

何でそうなるのが不明だ。

「え〜と……アテレコは……」

「何を言っている!アテレコなんていつかでいいよ」と、マキ先輩。

「アテレコはもう少しで終わるんだよね〜。だからいいんだよ」と、楓先輩。

「そうだぞ!アテレコより部員のほうが大事だからな!」と、冬馬先輩。

「……別にいいですけど。冬馬先輩?」

「なんだ?杏仁」と、冬馬先輩。

「家の布団とかに鼻血たらさないでくださいね」

私は、笑って続けた。

「もしもたらしたら、家からつまみ出しますんで」

「は、はい。」と、冬馬先輩。

そこに、カオル先輩が割って入った。

「杏仁!ストーカーはどんなやつだった!？」

「ストーカーですか……チラツと見えただけですけど、黒っぽ

いものが見えました」

「背は？」と、カイ先輩。

「私より高いです。180・・・くらいかなあ」

「うゝむ・・・」と、カオル先輩。

「心当たり、ありますか？」

「藤山・・・？」と、カイ先輩。

「ああ・・・あの科学オタクですか。ストーカーとかしそうなフインキですよねえ・・・」

みんな、絶句した。

「どうしました？」

「いや・・・何でも・・・」と、マキ先輩。

「何でもない、よあゝ」と、楓先輩。

「そうですか。あゝ・・・泊まりに来るなら、ちゃんと用意してきてくださいね。パジャマとか、貸せませんから」

「じゃあ用意してくるねえゝ」と、楓先輩。

「じゃあ、一回解散！集合は、杏仁の家だ！」と、マキ先輩。

「ラジャツ」と、部員たち。

私は部員たちに手を振ると、放送室を出た。

そういえば、買い物にも行かなきゃいけない。我が家には、ほんのちよつとの食材しかなかったんだ。

大人数だし、お鍋とかがいいかな。じゃあキノコとか買わないと。私は駆け足で学校を出て、登下校の道に入った。

鍋はいいけど、予算の問題だ。足りるかな。

前も言った通り、私の両親は海外に出張でいない。そして、そのバカな親たちは生活費を全部持っていきやがったので、我が家には金はある限り無い・・・。なんというか、ある金はすべて援助金だ。私は石ころを思い切り切った。

その石ころは、私の前のほうにあった電柱に当たり、その電柱からドクロの仮面が顔をのぞかせた。

藤山（もうすでに呼び捨て）だった。

「ストーカーはあなたですか」

「人聞きの悪い」と、藤山。

「何ですか？また、クソ不味いチョコでも食わせるつもりですか。」

「いいえ、伝えたいことがあるんですよ」と、藤山。

「早く言ってください。あなたと喋っていると、イライラします」

「好きです！」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・」

「好きです！」

「ぐえぶツ！？」

何じゃこいつは！いきなり抱きついてきたよ。

「あつ、痴漢はつけ〜ん」

ズドガ！

飛び入り参加の楓先輩の跳び蹴りが、直に藤山に入った。

「大丈夫か！？杏仁！」と、マキ先輩。

「あのー・・・あれは藤山・・・ぐえぶツ」

何だこいつは。いきなり抱きついてきたよ。

「ああ！杏仁が痴漢に襲われている！」

ズドン！

カオル先輩のえぐるようなパンチが、マキ先輩の腹に入った。

「大丈夫か！？杏仁！」と、カオル先輩。

「あのー・・・あれはマキせんぱ・・・ぐえぶツ」

こいつも何だ。いきなり抱きついてきたよ。

「大変だ！杏仁が痴漢に襲われている！」

メキヤツ

カイ先輩のパンチが、カオル先輩にめり込んだ。

「大丈夫か！？杏仁！」と、カイ先輩。

「あのー・・・あれはカオルせんぱ・・・ぐえぶツ」

こいつら、何だ！？いきなり抱きついてきたよ。

「あ！杏仁が痴漢に襲われている！」

ドギャン

冬馬先輩の跳び膝蹴りが、カイ先輩を吹っ飛ばした。

「大丈夫か！？杏仁！」と、冬馬先輩。

「あのー・・・あれはカイせんぱー・・・ぐえぶッ」

ホント、何だ！？いきなり抱きついてきたよ！

「ボル スキーク！」

ズガガガ

櫛先輩のボル スキークが、冬馬先輩を大変なことにした。

「大丈夫か、杏仁」と、櫛先輩。

「あのー・・・あれは冬馬先輩です」

「え」と、櫛先輩。

あたりを見渡すと、残骸が転がっていた。

楓先輩は、跳び蹴りの勢いを止められずに、遠く離れたところに

転がっていた。

「あの・・・みなさん、そろそろ夕食にしませんか？」

残骸たちがよみがえった。

第十一話 姉との再会

「ただいまー」

私が、買出しから帰ってきた時のことだった。

「おかえりー！それと久しぶりー！」

久しぶり・・・？

私は、私に挨拶を言った人の顔を見た。

それは、どこか見覚えがあつて・・・。

「お姉ちゃん！！！？？」

「いやー、ホンマ、うちのユズキがお世話になつてー・・・。」と、姉。

「エヘヘ。そんなことないよー。杏仁さんはたまーに酔っちゃうこともあるけど、酔わなかったらとっても可愛くてやさしいー」と、楓先輩。

「何やー、杏仁。自分、何食つて酔つたん？教えてやー」と、姉。

「お姉ちゃんまで、杏仁って言つてのやめてよ・・・。」

「あはは、スマンスマン。ほんでユズキ、自分、何食つて酔つたん？」と、姉。

「ボンボンチョコ・・・。」

「プツ」と、姉。

「・・・お姉ちゃん。鍋作るんだけど。手伝つてくれない？」

「いいで。自分一人やつたら心配やしな。」と、姉。

「何その言い方。私の料理が心配なら、お姉ちゃんだけ食べなくてもいいのよ。」

「だって自分・・・その料理でワシを殺しかけたことあるやん。」と、姉。

藤山含む、周りにいた全員が吹きそうになった。

「それは六歳の頃の話でしょ！？もう！大体、何で家出した人がここにいるのよ！」

「あー・・・それやけどな。ワシ、男引っ掛けすぎて、行き場なくなってん（笑）」と、姉。

「バカ！」

「さすが安藤さんのお姉さんですね・・・」と、藤山。

私は、反射的に飛びのいてしまった。

「何でここに藤山がいるんですか！」

「僕もここでお泊りさせてもらうことになりました」

「ストーカーと一つ屋根の下なんて嫌です」

私がそういうと、ひょこひょこ楓先輩がやってきた。

「大丈夫だよあ、杏仁さん。僕と一緒に寝てあげるから」

「なっ、何！？」

ソファで横になっていた一人が、過剰な反応を示した。

「よ・・・よし！杏仁！私も一緒に寝てやるう！」と、マキ先輩。

「遠慮しておきます。下心丸見えですよ」

私はそう言い残して、キッチンへ向かった。

「さっきお姉ちゃん是我的料理を馬鹿にしたけど・・・私が一人で鍋を作って、上手くできたら、さっきの言葉は取り消してね。」

「おー。望むところや。」と、姉。

ちなみに姉の名前は、安藤クヌギ。三年前に家出した十八歳。

姉が関西弁なのは、家出先が関西だったから。

何だかんだうるさいけど、昔はいい姉だった。

昔は。

「召し上がれ」

私を除いた全員が、鍋を覗き込んで怪訝そうな顔をした。

「なあ、ユズキ・・・？何をどうしたらこうなるん？」と、姉。

「え？買ってきた材料を入れただけですけど。」

「まあ・・・問題は味やからな。味で勝負や。」と、姉。

私を除いた全員が、底が深い皿に鍋の具を入れる。

「・・・異臭が・・・」と、カイ先輩。

「あ、そうですか？文句があるなら、食べなくてもいいんですよ？」

「・・・杏仁は食べないのか・・・？」と、カオル先輩。

「さつき私、散々味見して、おなかいっぱいなんですよ。遠慮なさらずにたくさん食べてくださいね」

私を除く全員が、鍋の具と汁を口に入れた。

「どうです？我ながら力作だと思っんですけど。」

「安藤さん・・・あなた、科学部に入ることをお勧めしますよ。」

この腕なら、きっと活躍できますよ・・・」と、藤山。

「お褒めの言葉はうれしいんですけど。生憎、ストーカーのいる部活は入りたくありません」

私は一刀両断した。

「どう？お姉ちゃん」

「・・・きつさまあ・・・」と、姉。

「？」

「妹に料理で殺されそうになったの、これで二回目やでえー！！来い！貴様を調教したる！」と、姉。

「え！？おいしくなかったですかあ！？皆さん！」

私の質問は、虚しく響いた。

第十二話 ユズキの好きな人？

「お風呂、空きましたよー」

私は、脱衣所から居間に向かって叫んだ。

「おう」と、マキ先輩。

後から、マキ先輩が返事をする。

・・・こういう夫婦みたいなシチュエーションは、実は苦手。ちよつと照れる。

私に変な妄想を描いていると、

「マキちゃん、お風呂はいるのー？なら僕も入るー」と、楓先輩。

「・・・見た目は子供。カラダは・・・」

「マキ先輩、いやらしいこと考えてないで、とつととお風呂に入ってください！」

私はマキ先輩の爆弾発言を遮り、脱衣所を出た。

脱衣所を出て早速、

「何や？いいフィンキや〜ん」と、お姉ちゃん。

「マキ先輩とは、ただの部活仲間！お姉ちゃんも人の心配してないで、彼氏でもつくれば？」

「そやなあ・・・でも、ワシの美貌やからなあ・・・彼氏、何百人もつくれるんちゃう？」と、お姉ちゃん。

「・・・それ、男引つ掛けすぎた事の言い訳？」

「ちやうちやう！わからんやつちゃんあゝ、ホンマに！」と、お姉ちゃん。

「関西人は関西に帰れ。」

「実の姉に何やねん、その態度は！コロが悲しむで〜」と、お姉ちゃん。

「ちよつとお姉ちゃん、コロの話は・・・」
そのときだった。

「コロって誰だ？」

「・・・カオル先輩・・・」

お姉ちゃんはさもおかしそうに笑った。

「あー、聞いてないん？コロっていうのは、ユズキの好きな男やでえ」

「え・・・」

カオルは、一瞬耳を疑った。

しかし、クヌギは確かに言ったのだ。

コロは、ユズキの好きな男だと。

「もー、お姉ちゃん！」と、ユズキ。

そしてクヌギは、カオルの耳元でささやいた。

「何や、シヨツクかいな？」

カオルは、誰が見てもわかるほどに慌てた（ユズキはわかっていません）。

「いや、全然そんなんじゃないっすよ！」

「ホンマかいな？」と、クヌギ。

ユズキだけが、事情を理解していないらしい。

「もう、お姉ちゃん！先輩のことからかうのやめてよ。・・・先輩、布団敷きに行きましょう」と、ユズキ。

「ああ」

二階へ行き、カオルはユズキと布団を下ろした。

しかし・・・カオルはコロのことで、もやもやしていた。

「なあ・・・ユズキ」

「何ですか？」と、ユズキ。

「コロって・・・」

ユズキはほんの少し、頬を朱に染めた。

「ああ・・・コロ、ですか。あだ名なんですけど、色々な事があって定着しちゃって・・・。コロは大げさに言っていると幼馴染で・・・お姉ちゃんが家出する前まで、ここにいたんですよ。・・・ながい間を共に過ごしただけあって、そりゃあまあ色々ありましたよ。一

緒に散歩に行ったり・・・と、ユズキ。

「今でも好きなのか？」

「それはもちろん・・・コロはどうだか知りませんけどね。」と、ユズキ。

そこに、クヌギが現れた。

「あゝ．．．勘違いしちゃあいかなよ、カオル君。コロっちゅうんは、昔飼ってたポメラニアンの名前やで。コロコロしてるんで、コロや。」

[illegible]

「何や……知らんかったんかいな」と、クヌギ。

「えーと、先輩……何だと思ってたんですか？」と、ユズキ。

「人間・・・」

その日は、コロコロの話を何度も蒸し返されるはめになった。

第十三話 いじめる奴はフルボッコ

「先輩方、起きてください！朝ごはんできてますよー」

日曜日の朝八時。

朝ごはんのホットサンドの香りが、二階に充満している。

「今日はホットサンドお？」と、楓先輩。

「おめでとうございます。大正解です。私が全部作ったんですよ」

「」

「え・・・全部、っすか？」と、カイ先輩。

「ええ。昨日、お姉ちゃんに教えてもらったんで、うまくできたんですよ。」

マキ先輩がいきなり立ち上がった。

「何をモタモタしている！さっさと着替えてホットサンドを食べに行くぞー！」

「おー！」と、楓先輩。

「・・・じゃあ、早く来てくださいね。冷えちゃいますから」

私は、先輩たちの寝ていた部屋からでて、階段を下りた。

「ユズキ・・・」と、お姉ちゃん。

「？何？」

お姉ちゃんは、テーブルの上のホットサンドを指差して言った。

「何やねん、あの炭のカタマリは・・・」

「失礼ね！あれはホットサンド！見た目はあれだけど、味はおいしいんだから！」

「自分の味覚、信じられへん・・・。ま、問題は味やからな。」
その時、階段を下りてくる音がした。

「安藤さん・・・ホットサンドというのはどちらに・・・。」と、
藤山。

「ああ・・・ホットサンドはテーブルの上に・・・。」
「どれですか？」

私は、ホットサンドを指差して言った。

「これ。」

「・・・え？」と、藤山。

藤山はしばらく、目をこすったりしていたが、もう一度私に聞いてきた。

「ホットサンドは、どれですか？」

「これ。」

「・・・え」と・・・この炭のカタマリが、ですか？」と、藤山。

私は藤山の腹にパンチをめり込ませた。

「失礼ね！ホットサンドだって言ってるんだろぅがぁ」

「グツハツ、ぶううえっ」

そこに、先輩方計六人がやってきた。

「おう杏仁！ホットサンドはどれだ？」と、冬馬先輩。

「え？テーブルの上にありますよ？」

「？どれだ？杏仁」と、カオル先輩。

「えつと・・・これです」

私はテーブルの近くまで行って、指差した。

「・・・もしかして・・・これ、か？」と、マキ先輩。

「はい。」

「えーと・・・この炭のカタマリが・・・」と、カイ先輩。

私はカイ先輩にパンチを食らわせた。

「ホットサンドにみえなくてすみませんねえ・・・人が気にしていることではじめめるのやめてくれませんか？」

「ひつ・・・ごめんなさい、すみません！本当すみませんでした！」と、カイ先輩。

私は、残る先輩たちに振り向いた。

「あ、こっちは取り込んでますので。気にせず食事をしてください」

櫛先輩が、言った。

「この炭のカタマリを食べるのか？」

櫛先輩の断末魔の叫び声は、日本の一部に響いた。

第十四話 ゴールデンウィーク前の秘め事

4月27日、放課後の出来事。

「もうすぐでゴールデンウィークですね」

私は、窓際でたそがれるマキ先輩に話しかけた。

「……………」

返答はなし。

「アテレコも人通り終わりましたし……思う存分遊べますね」

「……………」

返答はなし。

私は諦めて、カイ先輩に訊いた。

「マキ先輩、どうしちゃったんですか」

「連休って聞いたとたんにあんな感じになっちゃって……」と、

カイ先輩。

……居残り報告受けた小学生か、アイツは。

私は呆れて、マキ先輩を眺めた。

「マキ先輩？」

「……………」

もちろん返答は無し。

すると、楓先輩がちょこちょこ歩いてきた。

「マキちゃんねえ、ゴールデンウィークに杏仁さんに会えないから、落ち込んでるんだよ」

「パベロツ!？」

マキ先輩は変な声を上げた。

「楓、何を言う!私は部員に会えなくて暇なので落ち込んでいるだけで、別にユズキに限ったわけではないぞ!」

マキ先輩は必死で弁解を続けたが、みんなに白い目で見られた。

「…………別にいいじゃないですか、会えなくても。ゴールデンウ

イークが明ければ、すぐに会えるんですから。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

みんなが沈黙したときに、エセ関西弁が割り込んできた。

「何やねん、男心のわからんやつちゃんあゝ。連休中も会っていないと気がすまないっていう男心をわかってやれや、ユズキ。」

「お姉ちゃん!？」

「なんでここにお姉ちゃんがいるのよ」

「何やねん。ワシもまだ18や。そりゃあ学校も通うつちゅうねん。」

「不法侵入じゃないの」

姉は私を無視し、マキ先輩に向き直った。

「自分の気持ちはようわかった。だから・・・」

さらに姉は、マキ先輩の耳元で何かを囁いた。

マキ先輩はしばらく目をぱちくりさせていたが、姉に向かってうなずいた。

「もう、お姉ちゃん。先輩に変なこと吹き込まないですよ？」

「変なことやあらへんでー。まあ、そのうちわかるから楽しみにしとき!」と、姉。

「な、何なに? マキちゃん、教えて」と、楓先輩。

「・・・・・・・・?」

ゴールデンウィークが来ても、姉とマキ先輩の秘め事はよくわからなかった。

もうすぐで、ゴールデンウィークがやってくる。

第十五話 ゴールデンウィーク一日目

姉とマキ先輩が何を企んでいるのかもわからずに、5月1日がやってきた。

5月1日、金曜日の午後3時。

私は買い物から帰ってきた。

「ただいまー」

私は買い物袋を玄関に置いた。

「……お姉ちゃん、いる？」

私は玄関のドアを開けた。

「ああ、お帰りユズキ！」と、お姉ちゃん。

「お帰りーユズキ！」と、マキ先輩。

居間には、マキ先輩もいた。

「あれ、先輩来てたんですか？前もって言うてくれたら、ケーキとかつくつたのに……」

「やめとけ、自分絶対炭ケーキつくるやん。マキ君腹こわすで！」と、姉。

「……お姉ちゃん、料理は一に愛情、二によい食材、三に腕、四に味よ。」

私はそれだけ言うと、マキ先輩に向き直った。

「マキ先輩は何で居るんですか？櫛先輩たちは？」

「ん？……ああ、実はだな、私の両親が二人で勝手に旅行に行ってしまっただな……連休世話になることになったのだ。」

「そうなんですか？でも、マキ先輩なら料理もそこそこできるでしょ？」

姉は笑いながら言った。

「実はやな、ユズキ。マキ君、ユズキ以上に料理ができへんらしいでー！」

「そうなんですか？・・・って、お姉ちゃんはお出かけなの？」

「せや。ちよーつと用事ができてなあ。夜までには帰るで。ほな、さいなら！」

姉は家をもうダッシュで出て行った。

「あの一・・・マキ先輩。」

「な、何だ杏仁？」

「料理、教えましょうか？」

私はキッチンに、バーゲンで売っていた卵を並べた。

「いいですか？今からオムレツをつくります。マキ先輩、そこそこはお料理できないと困りますよ？」

「はあ・・・」

「では、まずは卵を割ってください。」

「う、うむ。それっ！」

グチョアッ

「あの一・・・マキ先輩？卵割るのは、別に額でなくても・・・」

「う・・・うむ。今のは少し失敗したただけだ！」

「じゃあ、次はこっちの卵を溶いてください。」

「うむ。それ！」

ビチャビチャビチャッ

「先輩！とんできます！！卵、とんできます！」

「う・・・うむ。それで、この溶き卵をどうするのだ？」

「はい、卵をこうしてこうして・・・」

「・・・そういえば、杏仁って料理下手じゃなかったか？」

「悪かったですね、料理下手で・・・実は、オムレツは、好きだった祖母に教えてもらった料理なんです。祖母が大好きだったし、オムレツも大好きだったので、これだけはうまくいったんですよ。」

「そうだったのか・・・道理で・・・アツウー！」

「・・・炊飯器の煙に触れるなんて、何年学生ですか、先輩。」

「辛辣な言葉！大丈夫？とかの一言も無いのか！？」

「・・・呆れて何も言う気になりません」

午後5時、やっとオムレツ（×2）が完成した。

「・・・そういえば、マキ先輩って連休中はずっと一人なんですよね」

「そうどうぞ」

マキ先輩は、ソファに寝そべりながら言った。

「夕飯には早いですけど、一緒に食べませんか？」

「えっ!？」

マキ先輩は、いきなり起き上がった。

この人は、ひとつひとつの反応が面白い。

「だって、クヌギさんが・・・」

「あの人なら、食べるもの見つけて食べますよ。ですから、一緒に食べましょう」

「・・・じゃあ・・・」

私と先輩はテーブルについた。

オムレツを口に運び始めてからしばらくして、私は口を開いた。

「・・・先輩は、ペットとか飼っているんですか？」

「んあ？ペット？・・・飼ってないぞ」

「飼ってみればいいのに。ポメラニアンとか、可愛いですよ。」

「・・・それはコロだけだろ？」

「でも、コロ以外の犬だって、見ている分は可愛いですよ？」

ピロリロン

「あ・・・メールです」

私はケータイのメールを開いた。
姉からだった。

『スマンスマン、夜までに帰れへんかしれん。マキ君にも伝え
といてや』

クヌギ
『

第十六話　ゴールデンウィーク一日目・2

私はケータイの電源を切った。

「姉が、夜までに帰れないかも、だって。」

「え」

「まあ、いいんじゃないですか？姉だってもう18ですし。好きなようにさせとけば、そのうち帰ってきますよ。」

「ああうん、そうだな。ひとり立ちを考えてもおかしくない年頃だしな・・・アハハハハ」

「・・・お風呂、入ります？もう焚いてありますよ」

「うむ。オムレツも食べ終わってたし、はいってくるぞ！」

マキ先輩は脱衣所に駆けていった。

それにしても暇だ。

私はオムレツの皿を洗いに、キッチンへ向かった。

・・・そうだ。先輩がお風呂に入っている間に、アイスでも買いに行こうかな。

私は二人分の皿を洗い、手紙を書いて家を出て行った。

アイスはコンビニが一番安いので、私は家の一番近くのコンビニまで徒歩で行くことにした。

「あれっ、安藤さん？」

「あ・・・未冬ちゃん、こんばんは。」

コンビニには、未冬ちゃんが居た。

「安藤さんは、明日からどこか行くの？」

「・・・いえ。先輩のお守りもありますし。」

未冬ちゃんは目を見開いた。

「先輩って、マキ先輩！？」

「はい。旅行に置いていかれたみたいで・・・家で預かることになっただけですよ」

「いーなー！うらやましー！」

「まあ、先輩が居るだけ、にぎやかで楽しいですよね」
未冬ちゃんは目をぱちくりさせた。

「・・・そういう意味じゃないんだけど・・・」
「え？」

「だって！あんなかつこいい先輩と連休一緒に過ごすんだもん、そりゃーラブイベントとかに期待しないと〜」

「・・・そういうものですか？」

「そういうものでしょう、女子の本能として。」

私は小首をかしげながらアイスのコーナーへ向かった。

「だって、先輩とはただの部活仲間ですし、ラブイベントも何も・

・

「はあ・・・こりゃあマキ先輩たちも苦勞するわ・・・」

「・・・へ？」

「なんでもない。じゃあ、私は帰るね！バイバーイ」

「はあ。」

私はアイスを3つ買って、コンビニを後にした。

家から一番近いコンビニと言っても、家からはだいぶ離れている。もう空は黒くなってきている。

私が空を眺めていると、誰かとぶつかった。

「あ、すいません。」

「あゝ、杏仁さんだあゝ」

楓先輩だった。

「楓先輩。こんばんは」

「こんばんはあ」

「・・・家にマキ先輩が居るんですけど、楓先輩も来ますか？」

「うん、いくいく。」

こうして、楓先輩も家に来ることになった。

「ただいま。すいません、遅くなりました」

「おかえりー杏仁、遅いぞお」

「ただいまあゝ、マキちゃん」

「お、何だ。楓も居るのか？」

私はジャンパーを脱ぎながら言った。

「はい。偶然見つけたんですよ」

楓先輩は、マキ先輩の耳元で何やら囁いた。

「何おうっ！そんな事は絶対に無いぞおお」

マキ先輩は何やら焦っていたが、その光景は何だか微笑ましかった。

夜まで散々騒いで、楓先輩は帰っていった。

こうしてゴールデンウィークの一日目は無事に終わった。

第十七話 ゴールデンウィーク二日目

ゴールデンウィーク含め、私とマキ先輩の同居生活の二日目。

「マキ先輩、何ですか？コレは。」

私は鼻をつまみながら、その『コレ』を指差しながら言った。

マキ先輩は私の目の前で、腰を丸めながら言う。

「……………ハンバーグ、です」

「……………これが？」

「……………うん」

私は、先輩がハンバーグだと言った物を見つめた。

どう見ても、ハンバーグには見えない。ただの、真っ黒な炭である。

真っ黒な炭はさて置き、この状況に到るまでにはたくさん（？）な事があったのでございますよ。

さて、少し遡ります。

その日は起きるのが遅く、もうお昼近くだった。

しかしその日は珍しく寝覚めもよく、ベッドから起き上がろうとした時だった。

ドッギャー……………ン！！

一回から凄まじい爆発音。

私は急いで階段を下りた。

キッチンのほうをのぞきにいくと、そこにはアフロにちかい髪型をしたマキ先輩と、『（マキ先輩の自称）ハンバーグ』があった。

そんなこんなで、現在に到る。

「・・・もう一度聞きますけど、コレが、何だった？」

「・・・ハン・・・バーグ・・・です」

自信なさ気に目をそらすマキ先輩。

私はわずかな可能性にかけて、マキ先輩の額に手を当てた。
平熱である。

「・・・マキ先輩？」

「は、はい」

私はにこやかに笑いかける。

「眼科の場所って分かります？」

「え？あ・・・はい」

「いつてらっしゃいな」

マキ先輩はしばらく「・・・？」という顔をしていたが、最後
には「ハイ」と言って家を出て行った。

さて、と・・・。

朝からハンバーグって言うのもなんだけど、作り直すか！

姉が帰ってくるかもしれないし・・・一応、3個作っておこう。

何度も言っけれど、昔はいい姉だったしね。

昔は。

知つての通り、私はオムレツ以外はそんなにうまくできません。

なので（「最初から使え」と思われるかも知れないが）、料理本
を使うことにしました。

さてと。まずは、ひき肉だかをこうしてこうして・・・。

あ、にんじんとかを入れてみてもいいかも。

早速切ろう！

スパッ

ぎゃ ああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああ

指が・・・指が・・・ヒイイイ！！

いや・・・まだだ！このくらいで私のクッキングソウルは折れないぜ！

私は傷口に絆創膏を貼ると、再びにんじんを切り始めた。

それから数分経って、無事ににんじんを切り終えることができた。よし、そしてこのひき肉だかをにんじんと一緒に揉んで、焼くのだな！

そう
りゃ
！

ひい や ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ

アツツイ！アツツイ！

いや・・・まだだ！このくらいでは、食の神様ナグーレ・コローセ（殴れ・殺せ）に表彰された私のクツキングソウルは折れないぜ！
私は火傷したところに水をつけると、再びひき肉だかのにんじんを焼き終え、ハンバーグを3つ完成させた。

私がハンバーグの出来に感動していたときだった。

「ただいま、杏仁」

これは、マキ先輩。

別にそこまではよかった。

「ただいま、杏仁さん」

！？楓先輩（汗）

「腹減ったぞー、杏仁」

！！？カイ先輩（汗）（汗）

「今日の飯、なに？」

「……!? カオル先輩（汗）（汗）（汗）」

「おじゃましてーす」

「……!? 冬馬先輩（汗）（汗）（汗）（汗）」

「ただいま」

「……!? 櫻先輩（汗）（汗）（汗）（汗）（汗）」

そして、先輩たちは私に言うのだった。

「杏仁、飯っ！」

第十八話 ゴールデンウィーク2日目・2

ゴールデンウィーク2日目の、午後2時。

「うわぁー・・・」

私は、その風景に目を細めた。

「久しぶりに来たよお、ここ」

楓先輩は、ぴよこぴよこと小さくジャンプする。

「本当久しぶりだなー。最後に来たのいつだったけ？」

カオル先輩は、ガラスをつつく。

「うおおおう！？杏仁、ハブが！ハブが！」

マキ先輩は、何だか絶叫している。

「杏仁、後でハブ対マングースが・・・」

地味なことに興味しんしんな、櫛先輩。

「杏仁、あっちでは巨大ムカデ対ネズミが！」

グロテスクな妄想を抱いている、冬馬先輩。

「杏仁！あっちではマイケルとジャクソン君のショーが・・・」

妙にコドモっぽいショーを見ようとしている、カイ先輩。

そう。今日は、暇なので動物園＋水族館に来ちゃってます。

私は呆れ半分、冗談半分で先輩方に声をかけた。

「ほら先輩方！早く来ないと迷子になっちゃいますよ！」

「む、心配要らんど、杏仁。私たちはこう見えても17歳なのだ。」

「そういうところが心配なんですよー！」

私は先輩たちを引っ張り、イルカトンネル（ガラスのトンネルの上を、イルカが通る）を一緒に通った。

何だかマキ先輩は、トンネルの天井をを見ながらオドオドしてい

たが、私は気にせずに先を行った。
が、それが間違いだった。

みんな、見事にはぐれてしまっていた。

「あれ……先輩……？」

私は、先ほどのマキ先輩のようにオドオドしながら道を進んだ。
ケータイで連絡をとろうものの、私のケータイは通話機能がついていない。そして残念なことに、先輩たちのメールアドレスも知らない。

私は諦めて、人だかりの出来ている売店へ向かった。

売店にも、先輩たちは居なかった。

私はアイスクリームを食べながら道を進み、水族館の敷地から、動物園の敷地に移った。

動物園の敷地にも人だかりが出来ており、ここだけ地球温暖化が起きているんじゃないかと言うほどに暑かった。おかげで、アイスクリームはすぐに液体になった。

私はハブ対マングースの場所を練り歩き、グロテスクな最期のネズミが居る場所も練り歩いた。

が、先輩たちは一人も見つからなかった。

私は動物園の敷地から出、マイケルとジャクソン君のショーがやっている場所を見に行くことにした。

マキは一人、「迷子」になっていた。

本人は無自覚だが、これは十分に迷子と言える。

「あんにーん……？」

後輩の名を呼んでみるが、当然返事はない。

マキは諦めて、イルカのトンネルを再び通りぬける。

マキは、このトンネルは嫌いであった。

嫌いというか、怖いのだ。

このトンネルのどこから水が漏れてきたら・・・というネガティブな思考にとらわれすぎているからである。

マキは、売店を探した。

ひよっとしたら、のんびりアイスでも食べているかもしれない・・・などと考えながら。

でももし本当にのんびりアイスを食べていたら、ちゃぶ台返し
1回や2回は許してほしい。

マキは首をひねり、辺りを見回す。

ユズキも楓もその他も、みんないなかった。

マキは、もう色々と疲れたのでアイスを買おうと思ったが、残念なことに小銭も札も無かった。

マキは諦めて、売店を離れた。

ハブ対マンガースの場所にもユズキたちは居なく、巨大ムカデ対ネズミの場所にも居なかった。

マキは再び諦め、マイケルとジャクソン君のショーを見に行くことにした。

やっぱり、いない。

諦めて別の場所を探そうかな・・・。
そう思ったときだった。

「杏仁！」

マキ先輩だった。

「・・・先輩・・・」

「杏仁、カオルたちは見つけたか？」

「いえ、まだです。先輩は？」

「私もまだだ」

「そうですか。でも、もう少しゆっくりでいいんじゃないですか？ 私もコレ、見たいし……。」

私は先輩に笑いかけた。

「そっか、そうだな」

ダメだ、ダメだ。

うーん、今言ってしまったないと……。

「ユズキ」

「はい？」

「すき、だ」

楓には、「ユズキには、マキの告白はお友達としてしか考えられていない」ことはわかってるのだが、妙に気にさわる。

楓は嫌な気分を振り払い、マキ達の後を追おうとした。そのとき、後ろから呼びかけられた。

「なんや、楓君やないか」

クヌギだった。

「クヌギさん・・・こんにちはあゝ」

「なんや、迷子かいな？お姉さんについてき！」

「もう杏仁さんたちは見つけたよあゝ。だから迷子じゃないよあゝ」

「あははは、なんやそうかいな。で、どうやってここまできたん？」

「電車だよあゝ」

「へえ、ユズキもセコイ手使いよんなあ」

クヌギが呟いたその時に、視界にカオルが現れた。

「あ、カオルちゃん」

「どこ言ってたんだ？探したんだぞ！」

そう言うカオルに、クヌギが笑いながら言う。

「カオル君、お連れさんの面倒はちゃんと見んと！」

「は、はい、すみません・・・」

そこに、マキとユズキと、その他の部員が見えてきた。

「よー！う！探したぞ、楓たちよ！」

マキが各部員に挨拶をしていると、楓が寄ってきて耳元で囁いた。

「杏仁さんに、ヘンなことしてないよね・・・」

「え・・・」

楓は何事もなかったかのように、笑顔でユズキの元に走り去っていった。

第二十話 記憶消失のチョコレート、再来？

妙に長かったような気がする五日間は終わり、普通の日常がやってきた。

でも、気になる点がひとつ。

何だか、マキ先輩が変。

変と言うか・・・いつも変なんだけど、ゴールデンウィークの2日目の動物園＋水族館から帰ってきたときから、いつもより遙かに変だった。

内容はうまく説明できないけど、目をそらしたり、変にどもらり・・・。

いつもなら傲然と胸を張って、うざったいくらいに自分を主張する人なんだけど・・・。

私は下駄箱を開け、靴を取り出して履いた。
ぱこん、と音をたてて、下駄箱は閉まる。

私は玄関を後にし、（無駄に）長い廊下を歩き始めた。

・・・何だか、おかしい。

マキはそう感じていた。

当たり前である。

好きだと言って、相手も自分を好きだと言ったのに、相手はいつもどおりに話しかけてきて、何も進展はないのだから。

（もしかして・・・軽く流された？）

マキは眉間に皺を寄せた。

考えられなくもない疑問である。

マキはパイプ椅子から立ち上がり、マイティーをコップに注いだ。

キィィィ・・・

不審な音をたてて、ドアが開く。

ドアの影から、ユズキの顔がのぞく。

「あ、マキ先輩。居たんですか？」

「・・・ゴホン。う、うむ。あ、朝のミーティングなのだ」

ユズキはおかしそうに言う。

「ミーティングって・・・先輩一人しかいないじゃないですか」

「む、むむ、朝の精神統一なのだ。」

「そうですか。・・・この前のアニメ見て分かったんですけど、先輩たちって女声じゃありませんか？」

「そ、そんな事はないぞ。私だってこんなに野太い声が・・・」

マキは、声が低くなるように頑張ってみた。

「あははは。そうそう、マキ先輩。描けって言われてたアニメの下絵、出来ましたよ」

「う、うむ。ご苦労だったな」

マキは、受け取ろうと手を伸ばす。
その時。

「あつ・・・」

手が触れ合った。

マキは、反射的に変な声を出してしまう。

しかし、ユズキはそんなこと屁とも思っていないようで、

「あ、すいません。・・・私、もうすぐホームルームなんで帰りますね」

なんて言って、明るく笑いながら去っていった。

マキは、心底「チャンス逃した！」と嘆いていた。

そんなマキを、電線の上のカラスだけが慰めてくれていた。

放課後の放送室。

珍しいことに、今日の放送室には活気が欠けていていた。

「……思うんだけど、この小説って『部活を主に書く小説』なんだが……ゴールデンウィークで引つ張りすぎてその辺が曖昧になってないか？」

と、カイ先輩。

「先輩、作者もその辺はよく分かってますから、ナメクジに塩をかけるようなことはしないでいいですよ」

「まあそうなんだが……。で、あのじめじめ野郎はどうする？」

カイ先輩は、マキ先輩を指差しながら言った。

私はマキ先輩に歩み寄った。

「マキ先輩……？」

マキ先輩は虚ろな目をして、何やら呟いている。

「マキ先輩、アテレコ……」

返答はなし。

「……まあ、いいや。杏仁、アテレコやろうぜ」

冬馬先輩がそう言ったとき、マキ先輩はいきなりグデンと倒れこんだ。

「マキ先輩!？」

私がそう呼びかけたとき、部屋の隅にはたくさんのチョコレートがあつたことに気づいた。

第二十一話 大告白

藤山を問い詰めて抹殺した後、私は、マキ先輩の眠る保健室へ向かった。

「失礼します」

保健の椿先生は居なく、マキ先輩の寝息だけが保健室に響いている。

私はベッドの方へ行き、マキ先輩の横に座った。

どれだけ乱暴に座っても、マキ先輩は起きそうにない。

あの後マキ先輩は、両手を振り上げて襲い掛かってきたりしたが、
樗先輩のボル スキックによって沈められた。

マキ先輩の頬は未だに赤い。それを見ただけで、酔っているということがわかる。

私はそつとマキ先輩のおでこに手を当てる。

・・・アツイ！

ひよつとして・・・マキ先輩の暴走はチョコのせいではなく・・・
熱？

そう思うと、急に藤山が気の毒になってくる。

私はハンカチを取り出すと、水にぬらしてマキ先輩のおでこに置いた。

何だか眠い。

私も寝ちゃおうかなあ・・・。

気づくと、マキは保健室のベッドの中だった。

頭がぼやっとする。

起き上がると、水にぬれたハンカチが落ちてきた。

よく見ると、「安藤ユズキ」とご丁寧なマッーペンで書いてある。

マキは、横を見た。
そこには・・・

「ゆ h k h d 1 ひう え h k b j k b 1 f ! ?」

反射的に変な声が出た。

その変な声のおかげで、ユズキは目を覚ました。

「ん・・・」

ユズキはこつちを向いて、何だか虚ろな目をしてくる。

「あ、先輩起きたんですか」

「うむ・・・」

「うーん・・・」

ユズキは大きくのびをし、どこからか体温計を出してきた。

「はい。熱があるかもです」

「う、うむ・・・」

マキは体温計を受け取った。

そして、沈黙がやってきた。

沈黙を破ったのは、ユズキだった。

「あの、マキ先輩」

「・・・む」

「最近様子が変でしたけど、何か私・・・悪いことでもしましたか？」

マキは、心底傷ついた。

本当に軽く流されたようだ。

「・・・もう一度だけ言っ」

「何でしょう」

「好きだ」

そしてまた、沈黙が訪れる。

しかし、ユズキは何だか慌てている。

「あのあのの・・・先輩、今日は・・・その・・・」
「なんだ」

ユズキはカレンダーを指差しながら言った。

「今日は・・・エ、エイプリルフルじゃないですよ・・・」
「知ってるよ。」

沈黙がまたしも訪れたとき、そこにかわいらしい声が割り込んだ。

「僕も、杏仁さんのこと好きだよ」

「楓！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに後ろを向いた。

「俺も好きだぞ」

「櫂！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに右を向いた。

「俺も好きだぞー。最近はお番が少なかったけどな」

「冬馬！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに左を向いた。

「俺もだ」

「カオル！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに前を向いた。

「俺もだぞー、前は全然喋ってないけど」

「カイ！（先輩）」

ユズキとマキが、同じタイミングに斜め後ろを向いた。

またまた沈黙が訪れたと思ったとき、ユズキが沈黙を破った。

「みなさん、今日は、エイプリルフルじゃないですよ・・・」

その声に、ユズキ以外の全員がツツこむ。

「知ってるよ！」

第二十一話 大告白（後書き）

ご愛読有難う御座いました。

つまらない小説ですが、最後まで読んでくださった方々には、本当に心から感謝いたします。

表現が間違っていたり、漢字が間違っていたり、作者にはツツコまなくてもOKです。

かえって、ナメクジに塩をかける的なことになってしまいますので、では、またいつかお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5597d/>

高校アニメ製作部

2010年10月20日01時20分発行